

NMSH TOPICS

— VOL.6 2017/5月 —



汲田 伸一郎 院長

今月の院長のイチオシ! 『血液内科』

遺伝子変異解析を院内で実施し

分子標的薬によるオーダーメイド医療を提供

造血器腫瘍性疾患の化学療法で豊富な治療実績 分子標的薬の治療にも注力

血液内科での診療の中心は造血器腫瘍性疾患であり、急性白血病、慢性骨髄性白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、慢性骨髄増殖性疾患、骨髄異形成症候群などがそれぞれにあたります。その他、各種貧血症や出血性疾患も重要な対象疾患です。

急性白血病、悪性リンパ腫などの造血器悪性腫瘍に対する化学療法では、治療症例数は極めて多く、良好な治療成績を上げています。また、末梢血幹細胞移植、骨髄移植、臍帯血移植など造血幹細胞移植も積極的に進めており、都内でも有数の移植施設となっています。

重症再生不良性貧血に対しては強力な免疫抑制療法や造血幹細胞移植を実施しており、良好な実績を上げています。

外来患者数は年間約1万1000人、入院患者数は常に40〜55人となっています。日本医科大学千葉北総病院も造血幹細胞移植を開

始して5年目となります。

化学療法は極力外来治療を多く取り入れ、患者の入院負担の軽減と入院期間の短縮に努めています。慢性骨髄性白血病の患者ではチロシinkinナーゼ抑制薬である分子標的薬による治療により、ほとんどの患者さんが完全寛解を得て、完全寛解を2年以上継続している患者さんもおられます。この患者さんは現在、臨床研究のもと治療中止のタイミングを見極める診療を継続しています。

今後とも患者さんの意志を尊重した医療を提供していきたいと考えています。



【日本医科大学における年別移植件数の推移】



患者さんに信頼される医師をめざし、日々研鑽を積む血液内科のスタッフ一同

患者さんの了解のもとに、治療方針を決定 インフォームドコンセントを重視して診療しています。

POINT 1

日本血液学会専門医の資格を持つスタッフの下、複数の医師や血液疾患の治療に豊富な経験を持つ看護師、その他のコ・メディカル・スタッフとともにチーム医療を行っています。

POINT 2

遺伝子変異解析により原因遺伝子を素早く解析・追求して分子標的薬による治療を実施するなど、世界の流れに先んじて最先端医療を心がけています。

POINT 3

末梢血幹細胞移植、骨髄移植など造血幹細胞移植を積極的に行っています。